

令和元年6月13日現在

機関番号：34509

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17310

研究課題名（和文）高機能自閉症スペクトラム障害児における情動調整とそのメンタルヘルスへの効果の検証

研究課題名（英文）Effects of emotion regulation strategies on mental health among children and adolescents with high-functioning autism spectrum disorder

研究代表者

村山 恭朗（Murayama, Yasuo）

神戸学院大学・心理学部・准教授

研究者番号：00728785

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：小学4年生から中学3年生54名（男子43名、女子11名）を対象として、質問紙による調査を実施した。抑うつ症状を基準変数、4つの情動調整方略およびデモグラフィック変数（性別と学年段階）を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。分析の結果、第2ステップにおいて、反すうおよび認知的再評価のみが有意な効果を示した（反すう： $r = -.459, p < .01$ 、認知的再評価： $r = -.332, p < .05$ ）。このことから、高機能自閉スペクトラム症児の抑うつ症状の改善においては、反すうと認知的再評価への介入が効果的であると思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国外では、これまでに自閉スペクトラム症児の情動調整に関する調査はあったものの、国内においてはそのような知見はほとんど認められなかった。本研究の結果を踏まえると、抑うつへの脆弱性が高いとされる高機能自閉スペクトラム症児への抑うつ予防においては、反すうの減弱および認知的再評価の向上が重要であることが示唆される。

研究成果の概要（英文）：In this study, self-reported investigation was conducted to examine association between emotion regulation strategies and depressive symptom among 54 children and adolescents (4th-9th grades, 43 boys and 11 girls) with high-functioning autism spectrum disorder. We used a hierarchical regression analysis in which Step 1 included demographic variables (gender and grades) and Step 2 included four emotion regulation strategies (i.e., rumination, problem-solving, distraction, and cognitive reappraisal). According to the analysis, rumination and cognitive reappraisal were shown to be unique contributions to the levels of depressive symptoms (rumination $r = .459, p < .01$; cognitive reappraisal $r = -.332, p < .05$).

研究分野：教育心理学

キーワード：情動調整 高機能自閉スペクトラム症 抑うつ症状

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder, 以下ASD) は社会性の困難, 興味・活動のこだわりを中核とする発達障害である。国外調査では, ASDの有病率は1%程度 (88人に1人) であることが報告されている (Center s of Disease Control and Prevention, 2012)。国内調査では, ASDに関する疫学調査はあまりないが, 公立の小中学校の担任教師を対象とした文部科学省が行った調査 (2012) では, 全児童生徒の1.1%がASDの主症状 (対人関係やこだわり等の問題) を著しく示すことが報告されている。

ASD児では抑うつ傾向が高いことが知られている。中学生を対象とした国外調査では, 定型発達児よりもASD児では抑うつ症状が強いこと, 対象のASD児のおよそ2/3が強い抑うつ状態 (カットオフ値以上の得点) にあることが報告されている (Whitehouse et al., 2009)。強い抑うつ症状が持続するなどの不適応状態が続くASD児では不登校や非行などの問題行動が引き起こされることが指摘されており (杉山, 2002), ASD児の精神的健康を高め, 問題行動を防ぐうえで, 抑うつ症状の予防・軽減を図ることは重要な課題となっている。

従来, ASDと抑うつ症状をつなぐ媒介要因として対人関係の不適応が強調されてきたが, 近年, ASD児における情動調整(emotional regulation)の問題が抑うつ症状をもたらすという新しい仮説が提唱されている(Laurent & Rubin, 2004)。情動調整とは, 不快な情動状態を適応的な状態に調整する過程である (Rottenberg & Gross, 2003)。その様式には, 反すう (rumination; 不快な情動に注意が焦点づけられる傾向), 問題解決(problem solving; 不快な情動の解消を図る傾向), 気晴らし(distraction; 不快な情動から注意をそらす傾向), 再評価 (cognitive reappraisal; 不快な情動を制御するために考え方を変容する傾向) などがある。

しかし, ASD児の情動調整に関する基礎的な研究知見は, 幾つかの点で十分ではない。例えば, ASD児と定型発達 (TD) 児の情動調整様式(strategy for emotional regulation)やその効果の異同である。ASD児では, こだわり症状や実行機能の問題のために, 適応的な様式である気晴らしや問題解決よりも不適応な様式である反すうが使用されやすいことが指摘されている (Samson et al., 2014)。しかしながら, ASD児を対象とした情動調整方略の効果に関する知見は, 国内にはあまり認められない。また, TD児にとって適応的な情動調整様式がASD児では必ずしも適応的に作用しないことが指摘されており (Pouw et al., 2013), TD児とASD児の間で個々の情動調整様式が抑うつ症状に与える影響が異なるか否かについても検討の必要がある。

2. 研究の目的

そこで本研究は, ASDの診断を有する児童生徒を対象として, 情動調整方略 (問題解決・反すう・気晴らし・認知的再評価) と抑うつ症状の関連を横断的に調査することを目的とする。

3. 研究の方法

【調査協力児】

本調査では関東地域にある放課後等デイサービス施設に登録する小学4年生から中学3年生54名 (男子43名, 女子11名: Table 1) が本調査に参加した。調査に参加したすべての児童生徒は, 以下に示す基準を満たしていた。過去にASD (自閉スペクトラム症, または広汎性発達障害) の診断を受けている。ASD特性を評定する尺度 (詳細は後述) において, 一定水準 (カットオフ値) 以上の得点を示す。

さらに, 本調査は自己評価式尺度を用いるため, 児童生徒の知的水準が低い場合には, 適切に質問項目に回答できないと考えられる。そのため, 本調査では, 次の基準も加えた。現在,

通学する小中学校において普通学級に在籍している，もしくは過去3年間で受検した知能検査においてIQが70以上を示した。

Table1 調査対象者の内訳

| | 男子 | 女子 | 合計 |
|----|----|----|----|
| 小4 | 9 | 5 | 14 |
| 小5 | 9 | 2 | 11 |
| 小6 | 13 | 1 | 14 |
| 中1 | 5 | 0 | 5 |
| 中2 | 1 | 2 | 3 |
| 中3 | 6 | 1 | 7 |
| 合計 | 43 | 11 | 54 |

【調査材料】

ASD特性 ASD特性を評定するために，児童用AQ日本語版（若林他，2007）を用いた。本尺度は5下位尺度（社会的スキル，注意の切り替え，細部への関心，コミュニケーション，想像力）50項目で構成される。回答形式は4件法（4：あてはまる - 1：あてはまらない）であり，得点が高いほどASD特性が強いことを表す。児童用AQは対象児の保護者が回答する形式である。カットオフ値は25点以上である。本研究における内的整合性は $=.84$ であった。

情動調整方略 情動調整方略を評定するために，小学校高学年・中学生用情動調整尺度（村山他，2017）を用いた。本尺度は自己評価式尺度であり，4下位尺度（問題解決，反すう，気晴らし，認知的再評価）16項目で構成される。回答形式は4件法（1：ほとんどない - 4：ほとんどいつも）であり，得点が高いほど各方略が頻回使用されていることを表す。先行研究において，信頼性および妥当性が確認されている（村山他，2017）。本研究における内的整合性は問題解決 $=.83$ ，反すう $=.81$ ，気晴らし $=.69$ ，認知的再評価 $=.80$ であった。

抑うつ症状 抑うつ症状の評定には，自己評価式尺度である Birlson Depression Self-Rating Scale for Children(DSRS-C：村田他，1996)の短縮版（並川他，2011）を使用した。2下位尺度（抑うつ気分，活動性および楽しみの減退）9項目で構成され，原版DSRS-Cと $.92$ の相関を持つことが示されている（並川他，2011）。回答形式は3件法（1：そんなことはない - 3：いつもそうだ）であり，得点が高いほど，抑うつ症状が強いことを表す。本研究における内的整合性は抑うつ気分 $=.73$ ，活動性および楽しみの減退 $=.71$ であった。

【手続き】

本調査に関する説明および参加協力依頼は，参加する児童生徒が所属するデイサービスのスタッフが保護者に対して文書を配布する形式で行われた。本調査への参加に関して児童生徒本人およびその保護者の同意が得られた場合に質問紙が渡された。回答された質問紙は郵送によって回収された。本研究の研究計画および研究手続きは，研究代表者が所属する大学の人を対象とする医学系倫理審査委員会の審査・承認を経て実施された（承認番号：HEB17-02）。

4. 研究成果

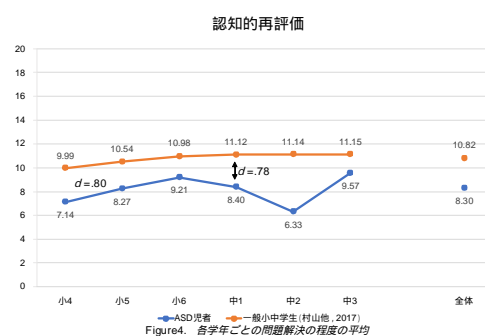
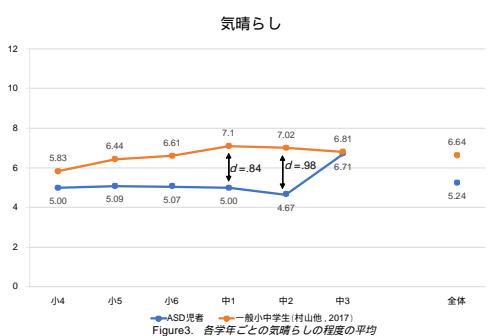
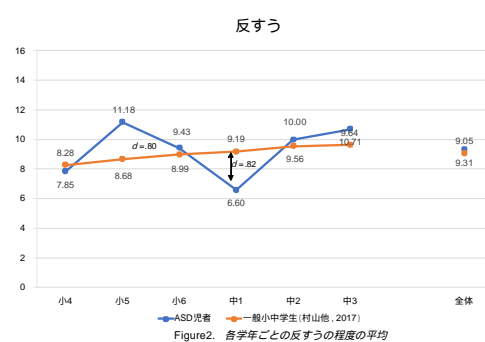
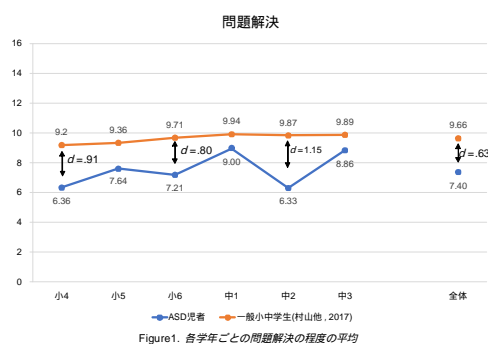
Table 2 に各変数の平均値および標準偏差と，相関係数を示す。抑うつ症状と情動調整方略の間には，反すうのみとの間に有意な正の相関($r = .296, p < .05$)が認められた。この結果は，一般児童生徒を対象とした先行研究（村山他，2017）と同様の結果である。一方で，一般児童生徒において確認されていた抑うつ症状と他の情動調整方略（問題解決，気晴らし，認知的再評価）の相関（村山他，2017）は，本調査では認められなかった（問題解決： $r = -.096$ ，気晴らし： $r = .152$ ，認知的再評価： $r = -.160$ ，いずれも *n.s.*）。

Table 2 各変数の統計量と各変数間の相関係数

| | | <i>M</i> | <i>SD</i> | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|---|--------|----------|-----------|---------|-------|--------|--------|---------|------|
| 1 | 性別 | - | - | - | | | | | |
| 2 | 学年段階 | - | - | - | - | | | | |
| 3 | 抑うつ症状 | 10.41 | 4.18 | -.061 | .089 | - | | | |
| 4 | 問題解決 | 7.41 | 2.77 | -.209 | .224 | -.096 | - | | |
| 5 | 反すう | 9.31 | 2.96 | .149 | -.024 | .296 * | .200 | - | |
| 6 | 気晴らし | 5.24 | 1.56 | -.227 * | .197 | .152 | .234 * | .004 | - |
| 7 | 認知的再評価 | 8.30 | 2.93 | -.194 | .051 | -.160 | .542 | .341 ** | .202 |

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

次に、先行研究（村山他，2017）で報告されているデータを利用し、ASD 児と一般児童生徒の情動調整方略の使用頻度について比較検討を行った（Figure 1-4）。反すうでは、ASD 児と一般児童生徒で大きな差は認められなかった（ $d = 0.08$ ）。一方、問題解決（ $d = 0.61$ ）・気晴らし（ $d = 0.59$ ）・認知的再評価（ $d = 0.71$ ）では小さい～中程度の差が認められ、ASD 児ではその使用頻度が少なかった。特に、問題解決については、小学 4・6 年生（4 年生： $d = 0.91$ ，6 年生： $d = 0.80$ ，中学 2 年生： $d = 1.15$ ）で大きな効果量を示した。このことから、一般児童生徒と比べると、ASD 児は適応的な情動調整方略を利用しないことが示唆される。



情動調整方略と抑うつ症状の相関係数には、他の下位尺度得点を介した擬似相関が含まれている。そこで、各情動調整方略と抑うつ症状のより直接的な関連を検討するため、抑うつ症状を従属変数、各情動調整方略を独立変数とする階層的重回帰分析を行った。なお、ステップ 1 にはデモグラフィック変数（性別および学年）を、ステップ 2 には各情動調整方略を投入した。分析の結果は Table 3 に示してある。情動調整方略を投入したステップ 2 では、有意な説明率の上昇が認めれ（ $R^2 = .236$, $p < .05$ ）、反すうは抑うつ症状と正の関連（ $r = .459$, $p < .01$ ）、認知的再評価は負の関連（ $r = -.332$, $p < .05$ ）を示した。このことから、反すうを行う頻度が高い ASD 児ほど強い抑うつ症状を呈し、一方、認知的再評価を行う頻度が高い ASD 児ほど抑うつ症状

が弱いことが示唆される。

Table3 抑うつ症状を従属変数とする階層的重回帰分析の結果

| 変数 | R^2 | ΔR^2 | F | β |
|---------------|-------|--------------|--------|---------|
| ステップ1 | .012 | .012 | 2.970 | |
| 性別 (基準:男子) | | | | -.060 |
| 学年 | | | | .088 |
| ステップ2 | .247 | .236** | 2.572* | |
| 性別 | | | | -.175 |
| 学年 | | | | .104 |
| 問題解決 | | | | -.110 |
| 反すう | | | | .459** |
| 気晴らし | | | | -.183 |
| 認知的再評価 | | | | -.332* |

* $p < .05$; ** $p < .01$

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

村山恭朗・伊藤大幸・高柳伸哉・上宮 愛・中島俊思・片桐正敏・浜田 恵・明翫光宣・辻井正次. (2017). 小学校高学年児童及び中学生における情動調整方略と抑うつ・攻撃性との関連. 教育心理学研究, 65, 64-76.

〔学会発表〕(計2件)

島袋史奈・村山恭朗. 自閉スペクトラム症特性をもつ児童生徒における情動調整方略と抑うつ症状との関連. 日本発達心理学会 第30回大会 2019. 早稲田大学(東京).

島袋史奈・村山恭朗. ASD 児童生徒の抑うつ症状の変化 - 情動調整方略やストレスに焦点をあてて -. 日本心理臨床学会 第38回大会. 2019. パシフィコ横浜(神奈川).

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：島袋史奈

ローマ字氏名：Shimabukuro Fumina

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。